

## I : 宗教現象としてのキリスト教

### <前回> 聖書の構造分析

1. デュメジルの比較神話学 → インド・ヨーロッパ語族の神話体系の三分構造  
神々の構造－社会構造－思惟構造（三分イデオロギー）
2. 構造主義（記号論）の前提と方法
  - 1) 深層（文化の文法） → 表層（文化的な諸現象）
  - 2) 深層の諸層（意識→無意識→生命構造）
  - 3) 文化の個々の諸領域の構造と文化全体の深層構造
3. 神話の思考構造（レヴィ＝ストロース）  
人間存在の基本的矛盾の自覚 → 矛盾の漸近的解決  
二項対立（人間存在の宿命） 生－死 → 農耕－戦闘→狩猟  
生－死、神－人間、天－地  
自然－文化、男－女
4. 聖書の神話構造（1）：エデン神話  
自然・文化の未分化 → 自然・文化の分裂、対立 → 対立の解決（回復）  
命の木 ↑ ↑  
善悪の知識の木 罪（歴史の開始） 救済史  
神－人間 メシア（媒介者）・終末  
自然－文化（労働・罰）  
男－女 生－死
5. 聖書の神話構造（2）：バベル神話からペンテコステへ  
アダムの言葉 → 言語の多様化（分裂） → 多様性・対立の統合の試み  
①自然的分化(Gen.10) イスラエルの契約  
②バベル・混乱(Gen.11)  
自然－文化／1－多  
→失敗 →キリスト教・ペンテコステ(Acts.2)  
バビロン捕囚 多様性におけるコミュニケーション  
言語の豊饒さの統一
6. 分裂を克服する試み：グローバリゼーションとは何か？ → キリスト教的政治論  
1. 世界帝国＝一元化 2. 独立国家の連合体 平和論

## 第8講：現代聖書学の動向から

### 3 神の国と終末論

(1) 近代聖書学における「神の国」論

1. キリスト教神学と同様に、聖書学においても、「イエス」は常に研究者の中心的な関

心を占めてきた。歴史的イエスの探究こそが、新約聖書学を強く動機付けてきたと言っても過言ではない。とくに、中心を占めてきたのは、「神の国」「終末論」の問題であった。それは、イエスの宗教運動の核心に「神の国」のヴィジョンが存在し、それは終末論と密接に関連していると考えられたからである。

## 2. 「イエス研究／終末論」の変遷

### 1) 19世紀：近代聖書学の確立期、イエス伝研究

近代市民社会の合理性に準拠したイエス理解（市民社会の倫理の教師イエス）、  
「神の国」を理想的な社会状況という歴史内的な目標と解釈（近代人の尺度に切り詰められた終末論）

### 2) 19世紀末から20世紀初頭：20世紀の聖書学のパラダイムにおけるイエス

A. シュヴァイツァーらによる、イエス伝研究の否定的な総括と黙示的終末論の再発見（古代的な黙示的終末思想はイエスの宗教に固有のもの）

### 3) 20世紀の聖書学のパラダイムの浸透

イエスにおける黙示的終末論の意義についての聖書学の成果を認めた上で、終末論の現代的意義を終末論の現在化によって理解しようとする弁証法神学の動向と、モルトマンやパネンベルクなどの次の世代の神学者による黙示的終末論自体の意義の再評価の動き（1960年代以降）

### 4) 1980年代以降：20世紀の聖書学のパラダイムの崩壊と新しいイエス探究

黙示的終末思想に基づく宗教者イエスという理解の相対化、知恵の教師イエスなどの新しいイエス理解の登場

## 3. 終末論をめぐって

「終末」については、「神の国」の到来の時をめぐって、次のような対照的な議論がなされてきた。

未来的終末論：シュヴァイツァーあるいはヴァイスが指摘したイエスにおける黙示的終末論、終末＝神の国の到来は未来の出来事である（遠い、あるいは切迫した）。モルトマン、パネンベルク。

現代的終末論：パウロやヨハネのテキストに依拠したドッド（実現された終末論）あるいはブルトマン（説教における神の語りかけに直面した現在の危機・決断としての終末、終末論的現在）の終末理解

この二つの終末理解は、神の国あるいは救済の実現に関する、「いまだ」と「すでに」の対比としてまとめられるが、本講義ですでに述べた議論と結びつけられれば、これは「超越」と「内在」の関係と言い換えることもできる。つまり、「いまだ」と「すでに」は概念的には両立しない議論であるが、おそらく宗教学的に注目すべきは、こうした言葉の隠喩的な機能であり、二者択一ではない議論の組み立てと思われる（cf. エレミアスの終末理解、あるいは終末の先取りという時間論）。

### (2) 隠喩としての「神の国」

## 4. 新約聖書学→仮説・蓋然性における結論（伝承史を逆に辿る）

二文書仮説：Q文書とマルコ → マタイ、ルカ

伝承史：口伝→書記化

断片→文書化（付加、修正、変形、結合、編集）

方法論：様式批判、編集批判、文学社会学、構造主義など

↓

イエスの伝記的事項については大まかなことしか言えない（福音書は伝記ではない）

↓

イエスの教えについてかなりの蓋然性で言えること

イエスの宗教運動：巡回・共同生活／論争・教え／奇跡行為（病の癒し）

5. シュヴァイツァーがイエス伝研究を批判的に総括して以来、近代的な文学ジャンルの意味におけるイエスについての「伝記」を書くことは困難であると認められてきた——伝記的事実を確定できるだけの十分な資料が存在しない、伝記的事実として確定できることは少ない——。しかし、イエスの宗教運動の理解にとって、「神の国」がキーワードであるという点において、近代聖書学以降の研究者の見解は基本的に一致している。イエスの宗教運動は、「神の国」運動であった。

#### 6. イエスの福音

- ①「時は満ち、神の国は近付いた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ 1.15）
- ②「子たちよ、神の国に入るのは、なんと難しいことか。金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴を通る方がまだ易しい」（マルコ 10.24b～25）

#### 7. イエス時代の通常の「神の国」理解

- ・ 預言者的終末論：ダビデ＝ソロモン王朝の再建、ダビデの家系から政治的メシアが誕生する。
- ・ 黙示的終末論：神より派遣された上よりの超自然的メシア（「人の子」？）の到来による善悪の宇宙的な最終決着。その中で少数の残れる者が救われる。

↓

イエス運動における「神の国」の意味の転換＝隠喩化

善人が入る神の国 → 罪人が招かれる神の国

(3) 「神の国」の思想的意義——イエスの平等主義——

#### 8. 「神の国」の宣教

「神の国」の「国」の言語的意味は、現代人がイメージする「国民国家」「王国」といった国家機構に限定されたものではなく、元来「秩序」「支配」（領域）を意味すると、言われる。

国（バシレイア）：神の制定した新しい秩序（支配）

9. この「神の国」、つまり神の支配の下にある秩序（「神の秩序」）の意味・イメージを理解するには、それと対極にあるものと比較することが有効である。

神の秩序←→「この世」の秩序（古い秩序）＝罪（ハマルティア）

問題は、「この世」の秩序である「罪」の内実である。「この世」とは、まさに人間の日常性に他ならない。イエスの時代のユダヤ社会の日常性であり、現代日本の日常性である。

神の秩序の実現＝古い秩序の転換＝罪の解決＝救済 → 福音

↓

「山上の説教」（マタイ 5～7）

イエスの活動（教え・論争・癒し）

#### 10. イエス時代のユダヤ社会・地中海世界（この世）

イエス時代のユダヤ社会は、典型的なしかも極端な不平等社会である（もちろん、これはユダヤ社会だけの問題ではないが）。そこには、様々なレベル・領域・形態における階層性、二分法的な対立構造が見られる。

極端な階層社会

富める者／貧しい者、男／女、大人／子供、自由人／奴隷、  
ローマ市民／非ローマ人  
浄い人・義人／不浄な人・罪人

「罪」とは、言葉の基本的意味としては「的外れ」ということであり、個々の具体的な規則や法規を破ること(sins)以前に、本質的には、こうした規則の侵害が起こる前提としての「関係の歪み」（人間関係が歪んでしまっていること。Sin）を意味する。

人間存在（個人／社会）＝関係存在

神関係、自己関係、他者関係

罪＝関係の歪み

「関係の歪み」という「この世」の秩序は、まさに人間の日常性において確認できる。たとえば、食卓。誰と食卓を囲むのか、囲みたいのか。そこには人間関係、利害関係が端的に現れる。

Q：自分の食卓を反省するとどうなるか。

#### 11. 開かれた共食における神の国

イエスの宗教運動において現実化しつつあった「神の国」は、イエス運動の食卓を見る限り、罪人と食事を共にするというあり方として確認できる。階層的な社会秩序と関係の歪みに対する徹底的な平等主義である。

#### 12. 原始キリスト教における平等主義

イエス運動の平等主義は、原始キリスト教会（1世紀）のうちに様々な仕方で受け継がれた。たとえば、ユダヤ民族主義を越えた異邦人伝道の推進である（ペトロ→パウロ）。

「3:27 洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。28 そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。」（ガラテヤ）

#### 13. 理念と現実

しかし、イエスの平等主義が十分な仕方で受け継がれたとは必ずしも言えない点がある。つまり、残された階層性である（たとえば、男と女との間に）。イエスの「神の国」ヴィジョン＝理念とキリスト教会の現実とのギャップ、これはキリスト教における最大の問題である。教会も、「この世」の秩序と無関係ではない。

「11:3 ここであなたがたに知っておいてほしいのは、すべての男の頭はキリスト、女の頭は男、そしてキリストの頭は神であるということです。」（Iコリント）

Q：このキリスト教会のあり方を、アウグスティヌス『神の国』（岩波文庫）の立場から説明せよ。

#### 14. 現代聖書学の動向から

先に、1980年代以降、現代聖書学における新しい動向を指摘した。つまり、20世紀の聖書学のパラダイム（研究者のコンセンサス）である、「イエスの神の国＝黙示的終末論」という図式の解体である。それによって、現在「イエスの神の国」理解をめぐっては、様々な議論が展開されている。その内の有力な一つの学説が、「知恵の教師イエス」論である。

#### 15. 知恵の教師イエス

キリスト教に限らず、宗教思想において、知恵思想は中心的な思想の一つである。それは、旧約聖書における知恵文学の存在が示すとおりである——聖書の知恵文学は、古代ユダヤ社会の置かれた国際状況を反映しているが、伝統的な共同体の知恵という面と国際的グローバルな知恵という面とを有している（後期の講義、第1講2を参照）——。

クロッサンが指摘するように、知恵には、慣習的知恵（既存の秩序を肯定）、転換的知恵（既存の秩序の転換・批判）の二つの類型が存在するが、イエスの宗教運動に顕著な知恵思想は、転換的知恵と言える。

慣習的知恵：「父祖の知恵」、伝統的社会の中でそのメンバーとして適切に（＝幸福に）生きるための知恵。共同体の秩序を前提とする。因果応報説はその中心。

→ イデオロギー

転換的知恵：古い秩序を転換し、罪の秩序に対して人間性の回復を可能にする新しい秩序のヴィジョンをもたらす知恵。既存の秩序を批判的に相対化する。安息日批判などはその典型。

→ ユートピア、既存の秩序における既得権者＝権力から見て危険思想

→ 十字架

#### 16. 知恵から終末論を再解釈する

転換的知恵の思想から、「神の国」を理解することが可能であるとするならば、そのためには、人間性の回復を可能にする新しい秩序についての知恵という観点から、終末思想をその一つの表現形態として位置付けることが必要になる。知恵と終末との関係理解が、現代聖書学の中心問題の一つといえる。

### <聖書テキスト>

#### 1. マルコ

1:14 ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、15「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

#### 2. ルカ

3:8 悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などという考えを起こすな。言うておくが、神はこんな石ころからでも、アブラハムの子たちを造り出すことがおできになる。

#### 3. 使徒言行論

10:9 翌日、この三人が旅をしてヤッファの町に近づいたころ、ペトロは祈るため屋上に上がった。昼の十二時ごろである。10 彼は空腹を覚え、何か食べたいと思った。人々が食事の準備をしているうちに、ペトロは我を忘れたようになり、11 天が開き、大きな布のような入れ物が、四隅でつるされて、地上に下りて来るのを見た。12 その中には、あらゆる獣、地を這うもの、空の鳥が入っていた。13 そして、「ペトロよ、身を起こし、屠って食べなさい」と言う声がした。14 しかし、ペトロは言った。「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことはありません。」15 すると、また声が聞こえてきた。「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」16 こういうことが三度あり、その入れ物は急に天に引き上げられた。17 ペトロが、今見た幻はいったい何だろうか、ひとりで思案に暮れていると、コルネリウスから差し向けられた人々が、シモンの家を探し当てて門口に立ち、18 声をかけて、「ペトロと呼ばれるシモンという方が、ここに泊まっておられますか」と尋ねた。19 ペトロがなおも幻について考え込んでいると、“霊”がこう言った。「三人の者があなたを探しに来ている。20 立って下に行き、ためらわないで一緒に出発しなさい。わたしがあの者たちをよこしたのだ。」

#### 4. ヨハネ黙示録

1.1 イエス・キリストの黙示。この黙示は、すぐにも起こるはずのことを、神がその僕たちに示すためキリストにお与えになり、そして、キリストがその天使を送って僕ヨハネにお伝えになったものである。2 ヨハネは、神の言葉とイエス・キリストの証し、すなわち、自分の見たすべてのことを証しした。3 この預言の言葉を朗読する人と、これを聞いて、中に記されたことを守る人たちとは幸いである。時が迫っているからである。

#### 5. マルコ

13.14 「憎むべき破壊者が立つてはならない所に立つのを見たら・・・読者は悟れ・・・、そのとき、ユダヤにいる人々は山に逃げなさい。15 屋上にいる者は下に降りてはならない。家にある物を何か取り出そうとして中に入ってはならない。16 畑にいる者は、上着を取りに帰ってはならない。17 それらの日には、身重の女と乳飲み子を持つ女は不幸だ。18 このことが冬に起こらないように、祈りなさい。19 それらの日には、神が天地を造られた創造の初めから今までなく、今後も決してないほどの苦難が来るからである。20 主がその期間を縮めてくださらなければ、だれ一人救われない。しかし、主は御自分のものとして選んだ人たちのために、その期間を縮めてくださったのである。

#### <参考文献>

1. ブルトマン 『歴史と終末論』岩波書店
2. C.H.ドッド 『使徒的宣教とその展開』新教出版社
3. エレミアス 『新約聖書の中心的使信』新教出版社
4. ノーマン・ペリン 『新約聖書解釈における象徴と隠喩』教文館
5. M.J.ボーグ 『イエス・ルネサンス——現代アメリカのイエス研究』教文館
6. ジョン・ドミニク・クロッサン  
『イエス——あるユダヤ人貧農の革命的生涯』新教出版社

7. 大木英夫 『終末論』 紀伊國屋書店
8. 芦名定道・小原克博 『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』 世界思想社
9. 芦名定道 「現代キリスト教思想における終末論の可能性」(『基督教学研究』第 18 号、京都大学基督教学会)
10. F.F.ブルース 『イエスについての聖書外資料』 教文館